



アルマディアス

英雄伝

5

The Heroic Saga of Almadianos

高見梁川

Takami Ryousen

Illustration: 長浜めぐみ



主な登場人物

クラッツ

本編の主人公。18歳。
驚異的な身体能力を有する「脳筋」。素直な性格の好青年。



ベルンスト

悠久の時を生きる大魔導師。他者を寄せつけない
圧倒的な力を持つ。とある目的で転生を決意する。



コーネリア

クラッツの義理の姉。19歳。母譲りの美貌の持ち主。
貧乳なのを気にしている。



フェルベル

イエルムガント王国の第二王女。20歳。
妹とは対照的に大人しく控え目。見る人に偉い印象を与える。



スクルデ

元アースガルド帝国南方軍(第二軍)の軍団長。
王族の血を引く美女ながら、「狂姫」と恐れられる戦闘狂。



主な登場人物

ルナリア

イエルムガント王国の第三王女。18歳。
明るく積極的な美少女。武術にも優れ、庶民から人気がある。



フリツガ

ラッランド王国の王妹。19歳。
グリフォンを駆り自ら前線で戦う。通称「白髪の戦乙女」。



トリアステラ

妖魔の高級貴族。万を超える妖魔を支配する。
かつて人間の領土への大侵攻を主導した。



ヘイムダル

アースガルド帝国の皇帝。大陸を制覇すべく各国を
侵略する。帝国に君臨する絶対的なカリスマ。



魔王

神の代行者にして、世界を支配する者。
人間や妖魔より上位の階梯に属し、攻撃は通じない。





第一章

合同結婚式

The Heroic Saga of Almadianos

アルマディアス
英雄伝

目次 Contents

登場人物紹介	002
第一章 合同結婚式	005
第二章 妖魔と人と	123
第三章 階梯を超えて	219

「いやですっ！ どうして私ばかりがご主……クラッツ様と離れなければならないんだ！」

「そう言わずに頼む。お前が一番速いんだって！」

「ご褒美を要求するっ！」

アースガルド帝国の軍勢を撃退し、一旦ストラスブル領へ帰還したクラッツは、バシユタールで待つ女性陣と王都への報告を、グリフォンを駆るフリツガに頼んだ。

報告を急がなければならないにはわけがある。

近衛騎士団長ロズベルグの敗北に伴い、いち早く逃げ出したイェルムガンド王国魔導士団の

連中が、好き勝手な報告を国王クリストフェルにする可能性があるからだ。

もともとロズベルグが生きて帰還する以上、連中の嘘が通用する心配はないのだが、実は少々困ったことになっていた。

「……やりすぎたか。すまん、ロズベルグ」

事の起りは、アースガルドの將軍ギウンターが撤退した直後に遡る。

魔導装騎兵ケイオスを相手に無双し、ある程度鬱憤を晴らしたロズベルグは、クラッツのもとを意気揚々と訪れた。

「クラッツ殿をもつてしても、あの男を倒すことは叶いませんでしたか」

どこか得意そうな笑顔で、自分は少なくとも一矢報いたのだぞ、と言いたげな口調であった。いったいどこに目をつけているのだと、クラッツは怒鳴りつけそうになる。

クラッツはあくまでも、ギウンターの奥の手を見極めようと手加減していたのだ。そもそも、クラッツの治癒がなければ死にかけていたおっさんに言われたくはない。

ロズベルグも無意識にそう思っているからこそ、逆にクラッツに対する優位を主張してしまおうのだろう。

「遠目に見させていたのだが、どうやら奴には物理攻撃が通じんようですな。しかしこのゲルラツハなら如何様にもしてみせます。ご安心ください」

クラッツが投擲した大剣ウォークライが無力化される瞬間を、ロズベルグは目撃していた。

自分が戦ったときには魔剣ゲルラツハの熱量が伝わったのだから、おそらく物理攻撃無効の魔導陣に違いない。

とするならば、今度こそ自分がギウンターを倒してみせる。否、倒せるのは自分しかない。ロズベルグがそう勢い込むのも無理はなかった。

しかしクラッツが受け入れられないのも当然である。

「調子に乗るなよ、おっさん」

「おや、気を悪くされたかな？ 何、あのギウンターを追い詰めただけでも大したものです

ぞ？」

そう言うところズベルグは、聞こえるか聞こえないかほどの小さな声で呟いた。

「……結局逃がしましたがな（フン）」

——ブチリ。

「上等だ、おっさん！ この際どっちが上か、はっきりさせようじゃねえか！」

「こちらこそ、望むところだっ！」

「俺が勝ったらその胸のロケットは没収するからな！」

「なああああつ？」

目に見えてロズベルグはうろたえた。そして後生大事そうにロケットを握りしめ、瞳を潤ませて哀願する。

「そ、それだけは……！ これは愛らしいルナリア様の思い出そのものなのですぞ！」

「幼児の裸を思い出とか言うなああつ！」

「美しいものを美しいと言って何が悪いかつ！ ルナリア様もつとも愛らしかった瞬間を永遠に保存しようとする事の何が悪い！」

「全部悪いわあああつ！」

五歳だぞ、五歳！ もつとも愛らしかったのが五歳って人としてどうよ？ しかも自分の嫁の全裸細密画なんて許せるはずがないだろう！

「ルナリアにばらさんとは言ったが、没収しないとってない」

「ならばっ！ このゲルラッハにかけて守り通すのみ！」

「よく言った！」

慌てたのは周りの人間である。

この人外二人が全力で戦った日には、どれだけ巻き添えが出るか見当もつかない。

というより、イエラムガンド王国を支える武神が互いにつぶし合った日には、国家の存立が危うかった。

「お、お待ちください！ 落ちついて……味方同士が争って何になるというのです！」

「渡しはせん……我が生涯の宝を渡しはせんぞおとおっ！」

「——ロリコンは滅べ。慈悲はない」

無慈悲な宣告とともに、人外二人の戦いが始まった。

「逃げろっ！ とにかく二人から離れるんだっ！」

「負傷者を見捨てるな！ ゲルラッハの雷に注意しろ！ 我々では消し炭にされるぞ！」

蜘蛛の子を散らすように兵士たちが散開していく。ある意味誰よりもよく上官の実力を知るからこそである。

「……ちよっと洒落にならないわね」

「ご主人様に本気で殴られたら木っ端微塵よ？」

「私にも逃げよう！」

それはトリアステラたちも例外ではなかった。上級妖魔として並外れた防御力を持つ彼女たちをもつてしても、クラッツとロズベルグの攻撃力は手に余る。

配下の吸精鬼とともに俊足を飛ばし、彼女たちが十分な距離を取るよりも早く、戦いの余波に捉えられた。

「——螺旋轟雷槍！」

「ぶっとばせ、ウォークライ！」

雷の属性付与されたゲルラツハの一撃を、迎え撃つようにウォークライが迎撃する。

衝撃波が交錯し、大地が割れ、破片がトリアステラたちに降り注いだ。

いや、降り注ぐなどという生易しいものではない。

暴風によって吹き飛ばされてくる石や瓦礫は、それだけで十分な凶器であった。

「きゃあああああああつ！」

「どわあああああつ！」

かろうじて身を守りながら逃げ惑う、哀れな彼らを容赦のない突風が吹き飛ばした。

突き抜ける衝撃波の間隙を縫って、ゲルラツハから雷の放電が網のように解放され、クラッツに襲いかかる。

「甘いっ！」

スカレットアダマントで錬金されたウォークライは、魔力を蓄積、増幅するのみならず減少させることもできる。クラッツを焼き尽くすかに思われた雷属性の魔導は、たちまちウォークライによって相殺されてしまった。

「な、なんだ？ その剣は？」

クラッツらしいただの巨大な重量武器だと思っていたロズベルグは驚愕した。

最高級のミスリル製の魔道具にも、魔力を減少させるなどという効果はない。

まだこの世界では知られていない、スカレットアダマントだからこそその技なのである。

「隙ありっ！」

ロズベルグの動揺の代償は大きかった。

互いの実力は伯仲していたが、だからこそ一瞬の隙がもたらした効果は絶大であった。

振り下ろされたウォークライに、ロズベルグがバランスを崩す。

「ぐおおおおおおおっ！ 負けられん！ 俺は負けられんのだっ！ 愛ゆえに、愛ゆえにこそ男は立ち上がることができる！」

しかしロズベルグの不屈の闘志は、鉄塊すら容赦なくへし折るクラッツの一撃を浴びながら、なお斃れることを認めなかった。

まさに王国の剣の面目躍如である。動機は別として。

「ま、その心意気だけは買うけどな」

その嗜好が幼女に向かっていなければ、クラッツとて見逃してやったのだが。

「——だが、許さん」

裸の幼女を肌身離さず持ち歩いて、ハアハアしているような男を見逃すわけにはいかない。

世のため恋人のため、断じて。

「悔い改めよ。王国の剣の名が泣くぞ」

「この無垢な愛がわからぬとは、騎士の真髓を解さぬ奴！」

「難易度高すぎなんだよっ！」

「聞いたような口をっ！」

ロズベルグは犬歯で強く左手の親指を噛んだ。皮膚に歯が食い込み、血が滴り落ちると、それをゲルラツハの刀身へ注ぐ。

「我が血を糧に暗黒の彼方より来たれ、奥義、墮天雷鳴！」

「こんなことで奥義とかっ！ どんだけ取られたくないんだよ！」

……というか、こんな技あるなら味方じゃなくギョウキター相手に使えよ。

血と魔力が結合し、強い負のエネルギーを造成していく。下手に食らえばクラッツといえどただでは済まない。

「ふははははははっ！ 死ぬ！ 我が愛を邪魔する者よ！」

「はい、アウトー！」

「へっ……?？」

体力を限界まで振り絞り、クラッツ一人を狙い続けていたロズベルグは、戦いの開始直後から沈黙していた女の影を見落としていた。

「クラッツ様は一人で戦うとは言っていないわよね」

先の戦いで敗れクラッツの恋人となった、アースガルド帝国の姫將軍スクルデである。

ずっと近くにいなながらも、戦いが始まってから完全に気配を隠匿していた彼女は、ロズベルグの背後から有無を言わさず後頭部を殴りつけた。

——メキリ。

鈍い音がしてロズベルグの視界が歪む。

衝撃と激痛、そして脳を揺らされた酩酊にも似た感覚を、ロズベルグは知っていた。

それは訓練生時代、意識を失う前に体験したものであった。

「このロズベルグ、決して倒れぬ！ ルナリア様への愛あるかぎり——！」

「——いい加減にしろ」

クラッツによる飛び込みざまのひざ蹴りをみぞおちに食らい、ついにロズベルグは立ったまま意識を失った。

王国の剣に相応しい……かどうかは別として、実に見事な立往生である。

「とほほ……とほほほ……」

意識を取り戻したロズベルグは一気に二十歳ほども老けてしまったようにしよぼくれて、沈みきっていた。

服の胸元を開いては、ロケットがないことを確認してがっくりとうなだれる。

王都に凱旋しても果たして使いものになるのか、心配になるほどであった。

「——そんなわけで、ご褒美あげるから！ フリッガ、伝令を頼む！」

「言質とりましたよ？ それじゃご主人様と私の子供を……二人の愛の結晶を！」

「待て、落ちつこう。政治的状况というものを考えようじゃないか」

「ならせめて赤ちゃんプレイでも」

ロリコンのロズベルグと戦った後にそのプレイはきつい。

「絶対にNO！」



先ほどから王宮に漂う空気がおかしい。

軍務卿であるセルヴィスはそんな違和感に戸惑いを覚えていた。

アースガルド帝国と戦争中ということもあり、王宮内の警戒は最高レベルを維持している。にもかかわらず、これほど悪寒がするのは尋常ではない。

いつから王宮は戦場になってしまったのか。

セルヴィスは長いこと実戦から遠ざかり、勘が鈍ってしまった自分を呪った。

（ここにロズベルグがいれば、こんな心配をする必要はなかったのだが……）

不幸にしてそのころ、頼みの僚友はクラッツに宝を奪われ、生きた屍と化していた。

「やれやれ、この老体に面倒を押しつけて……」

この王宮には、極めつけの悪意が間違いなく入り込んでいる。

勘の鈍ったセルヴィスも、それだけは間違いないと確信していた。

（——タイミングを間違ったわね）

宮廷魔導士長のモートレッドに憑依した邪妖精リユーシアは、配下からの報告が芳しくない

ことに苦虫を噛みつぶしたような顔で唸った。

クラッツとロズベルグが、ギンクンター率いるアースガルド帝国軍を国境外まで撃退したという報告が届いたのは、ちょうど昨晚のことだ。

この報告が決定的であった。

クラッツがスクルデを撃退した時点ではまだ迷いがあった貴族たちも、今回の勝利で完全にイエラムガンド王国の勝利を確信した。

そうなればもう、裏切りの算段よりも、英雄たるクラッツとの人脈構築や未来の女王であるルナリアとの伝手を優先すべきであった。

雪崩を打ったようにクラッツに贈り物を、側室の世話を、と奔走する貴族たちを、モートレッドは気も狂わんばかりの嫉妬と怒りで睨みつけていた。

(なんとという無定見、貴族としての誇りはどこへやった！)

実は貴族こそ権力の移り変わりには敏感に反応する。そして自らの権勢のため、それこそ誇りなど捨て、恥も外聞もないような行為に手を染める。

モートレッドはそれを知りながらあえて知らぬふりをするので、クラッツへの鬱憤をぶつけているのだ。

あの平民さえないなければ、今頃英雄として讃えられていたのは自分であったはずなのに。

リユーシアはモートレッドの手前勝手な妄想に失笑した。

もともと本人がそう望んでいたのだから、リユーシアはただ甘く耳元で肯定してやるだけでよかった。

これほど操りやすい男は、リユーシアの記憶のなかでも五指に入る。

才能も家柄も平凡、魔導に関する努力も並みよりは上程度。本当に下らぬ男である。

武人としての才能も格も、クラッツどころか戦死したルクレル將軍にすら及ばない。

ただ常軌を逸して強いのが、果てしない底なし沼のような自己愛と、自分より優れた才能に對する嫉妬であった。

こんな上司を慕う部下がいるはずもない。

リユーシア配下の邪妖精たちが、宮廷魔導士の掌握に骨を折っているのも、根本的な原因はモートレッドの不評であった。

そこに報じられたクラッツとロズベルグの勝利——もはや邪妖精が制御しうるのはモートレッドと同様、過ぎた野望に身を焼くわずかな愚か者たちだけ。

(でも、それならそれでやりようがあるわ。だって魔王陛下のご要望は楽しませることだけだもの)

決して人間たちに勝て、と言われたわけでも、皆殺しにしると言われたわけでもない。

自分が選ばれた理由をリユーシアはよく知っている。

(踊りなさい人間。お前たちのような弱き者でも、せめてもの慰みになることに感謝するのね)

勝利の報に沸く王宮の空気とは裏腹に、玉座に座る国王クルストフェルの表情は不穏であった。そのため参集した貴族たちも、迂闊に祝いの言葉を口に出せずにいる。

我が軍が勝ったのではなかったのか？

それともまた別などこかで、アースガルド帝国に攻め込まれたのだろうか？

ザワリザワリと貴族たちが憶測を小声で話し合うのを、クリストフェルは止めようともしなかった。

やや遅れてモートレッドが従者の宮廷魔導士を連れて入場すると、クリストフェルはピクリと眉を動かして太いため息をつく。

敏感な者はそれだけで、クリストフェルの不機嫌の原因はどうかやらモートレッドにあるらしい、と察した。

「——遅かったな、モートレッド」

クリストフェルの言葉に、モートレッドはその場で跪いて頭を下げた。

「面目次第もございません。戦争中のことゆえ研究から手が離せず」

「そうか。そういえば、また新しい新型魔導を開発したのであったの」

「左様でございます！ この度の新型魔導は従来の威力を数十倍にしたもので、もはや帝国の魔導装騎兵ケイオスなど恐れるに足りないでしょう」

モートレッドは得意げに、鼻息も荒く断言する。

別にモートレッドが出した研究成果ではないのだが、彼自身は、この技術が自分をもっと高みに導いてくれると信じて疑わなかった。

「以前にも同じようなことを言っておったな。自慢の新型魔導はケイオスに手も足も出なかったようだが」

残念ながら、クリストフェルの返事はモートレッドの望んだものではなかった。

国王の烈気を感じ取って、モートレッドが戸惑う。

「今度は間違いありません！ 出力も三割以上向上しており……」

「役に立たなかったばかりか、味方を見捨てて逃亡するとはどういう料簡だ？」

「そ、それは……」

ロズベルグめ、やはり報告しておったか。重傷を負ったというから、告げ口する気力も残っていないと思っていたが。

この場にはいないロズベルグをモートレッドは呪った。

もともとロズベルグは生ける屍と化しているので、報告は副官が独断で送ったものであった。

「何かの間違いでは？ 私はロズベルグ殿から撤退の命が下ったと聞かされております」

最悪の場合は隊長のルスタムに詰め腹を切らせよう。忠実な部下ではあるがルスタムの代わりはいくらでもいる。

モートレッドはそう考えていた。

「魔導士団は歩兵よりも早く真っ先に逃げ出したと複数の情報が届いておるわ！ 何が王国最強の精鋭だっ！」

クリストフェルが何より許せないのは、その結果、ロズベルグが死ぬ一歩手前まで追い込まれたことだ。

王国の剣を失う現実を前にして、クリストフェルはロズベルグの武が物理的のみならず、精神的にも王国を守ってくれていたことを悟った。

いざという時の心の支えとして、自分は思った以上にロズベルグを頼っていたらしい。だからこそ彼を守るところか、捨石にした魔導士団が許せなかった。

「戦場でのこと、きつと何らかの行き違いがあつたのでしよう。魔導士団が役に立たなかったなど、我らに嫉妬する者の戯言に違いございません！」

困ったことに、モートレッドは本気でそう信じていた。

妖魔を魔導媒体とする画期的な手法は、従来の戦術魔導に格段の進歩を与えた。

その威力がありながら、損害を与えられないなどありえない。

あれほどの魔導が役に立たなかったなど、あつてよいはずがないのである。

「往生際が悪いぞ！ もうよい、卿の宮廷魔導士長職も、今日この限りで解任する！ 後任は追つて沙汰する。下がれ！」

クリストフェルの宣告に愕然として、モートレッドは倒れ込むように手をついた。

自信過剰の彼らしく、その瞬間まで王の寵愛を疑つてはいなかったのである。

「お待ちください！ どうかお慈悲を……！」

これは何かの間違いだ。いや、きつとあの平民が自分の才能を妬んで仕組んだ陰謀に違いない。

惑乱したモートレッドは、クリストフェルにすがろうとヨロヨロと進み出た。

その一瞬だけで十分だった。

（——こんな奴に王の資格なんてないよ）

（そうそう、こんな才能に満ちた人材を切り捨てようなんて、到底王の器じゃない）

（そんな奴よりモートレッドのほうがよっぽど王の風格があるよ）

声なき声に背中を押され、モートレッドは歪んだ笑みを浮かべた。

リユーシアの洗脳でとうの昔に正常な思考は失われていた。

そうなのだ。私はこんな男に使われるような人間ではない。こんな物の道理をわからぬ王を戴いていては、国民が不幸になるばかりではないか。

「——そこをどけ！ 暗君め！」

哀れにすがりつこうとした男の豹変に、護衛たちも隙を衝かれた。

そもそも魔導士は白兵の素人である。もちろん騎士のように剣を扱うこともできない。

まして丸腰のモートレッドは、お世辞にも体格が良いとは言えないやせぎすで、王の間は何重もの魔導減少結界によって守られていた。

魔導を使えぬ状態で国王に危害を加えるなど、想像される状況ではなかったのだ。

否、一人だけ油断していない男がいた。

軍務卿セルヴィスその人であった。

「慮外者め！ 陛下から離れる！」

もはやモートレッドの目はクリストフェルすら見ていない。彼だけが信じる彼だけの世界に旅立っていた。

「死ねええええええっ！」

モートレッドが拳を振り上げる。虫すら殺せなそうな、貧弱な拳であった。

（――力を集中するんだよ。減少結果といっても完全じゃない。指先を少しばかり強化することぐらいはできるさ）

リユーシアに導かれるままに、モートレッドは右手の人差し指に魔力を込めた。

――刹那。モートレッドの肩口からへそのあたりまでを斬り下ろすように、セルヴィスの剣が深々と叩き込まれた。

肺を撃砕され、腸を断ち切られて、大量の血と臓腑が撒き散らされる。

結果的にそれは、クリストフェルから目の前の視界を奪うこととなった。

（ほら、まだ死ぬんじゃないよ。簡単なことさ。後少し、腕を突き出すだけでいいんだよ）

薄れゆく意識のなかで、モートレッドは最後の力を振り絞って人差し指を突き出す。

「ぐわああああああああっ！」

「へ、陛下っ！」

その指先は、クリストフェルの右目に根元まで突き刺さっていた。

――王都の事変と同じころ。

ルナリアたちが残るバシユータルに、異様な一団が近づいていた。

「なんだあいつらは？」

城壁の監視塔から街道を見ていた兵士が胡乱な声を上げた。

薄汚れた鎧をまとい、旗や家紋を一切さらしていない様子は、傍目には野盗のようにも見える。しかし統率されたきびきびとした動きは、間違いなく正規の教育を受けた軍人のものであった。

「ルナリア殿下を殺せ！」

「あの女さえいなければすべてうまくいくんだっ！」

「謀反人でも、フェルベルー殿下が唯一の王位継承者にさえなればっ！」

彼らの正体は邪妖精に唆されたフェルベルー一派の貴族たちである。

ストラスブル侯アルベルトの敗北が明らかとなった今でも、第一王女フェルベルーと第二王女ルナリアが王位継承候補者であることは厳然たる事実なのだ。

ルナリアさえ死ねばフェルベルーが王位を継承する可能性は高い。

クラッツはおろか、配下の精鋭まで出払っているバシユタールは、確かにテロの標的としては格好的かもしれないなかった。

兵士は慌てて僚友に向かって叫ぶ。

「急いでマリーカ様に伝えるのだっ！」

「……甘く見られたものね」

バシユタールの行政を預かる官僚団の長マリーカは、報告を受けて不機嫌そうに呟いた。

正規軍がいらないとはいえ、治安維持のための自警組織は残っている。

しかも彼らは長い間、生死をかけて妖魔と戦ってきた者たちなのだ。ここバシユタールで生き抜いているのは伊達ではない。

何より、ルナリア自身が一人で騎士団一個連隊に匹敵する。たかが寄せ集めの貴族軍数千程度が攻略などできるはずもなかった。

「下僕十三号、殿下と自警団に迎撃の用意を」

「イ——ッ！」

マリーカの下僕の官僚たちは、すでに人として大事なものを失ったようである。彼らが幸せならそれもよいが。

「クラッツがいなければ、バシユタールを侵すことができると思うたか！」

留守番を任され、クラッツと離れて暮らす日々に鬱憤が溜まっていたルナリアは、ストレス解消の好機に嬉々として剣を取った。

哀れなのは浅はかな野心に踊らされた貴族たちであろう。彼らはてっきりバシユタールがもぬけの殻であると信じていたのだ。

「……なんだか様子がおかしくないか？」

「バシユタール卿はいないはずだろう？ 兵だつてろくに残ってないはずだ」

「でも城壁にいただけでも五百はいるぞ？」

攻者三倍の法則という言葉があるが、貴族軍数千にとつて、城壁という防御施設に籠った五百の軍勢はそれだけでも十分に脅威となる。

想定外の事態に彼らは戸惑ったが、今さらここで引き返すという選択肢はない。もともと計画性のない暴走なのだ。

「敵は張り子のトラだ！ ひるむな！」

「ルナリア殿下を逃がすな！」

「勝利は我がものぞ！」

口ぐちに手前勝手な願望を口にしながら突撃を開始する貴族軍に、ルナリアは無情な宣告をする。

「死ね。無力な藁人形のごとく。旋風陣！」

魔剣ビスマルクから打ち出された魔力は、幾千の風の刃になって彼らに襲いかかった。首が宙を舞い、腕が千切れ飛び、主を失った馬が制御を失って味方を踏みつぶしていく。まさに地獄絵図そのものの光景である。

ほんの一瞬にして、都合のよい幻想は粉々に打ち砕かれた。

「押し出せええええええええっ！」

ルナリアの号令一下、バシユタールの自警団が鬨の声を上げて城門を開く。狩る者と狩られる者の立場はもはや完全に逆転していた。

「ひ、ひいいいいっ！ 助けてくれ！」

「こんなはずは……こんなはずじゃなかったのにいい！」

「降伏する！ 命だけはっ！」

「ここまでされる謂れはないっ！ 私は名門の……」

「ごちゃごちゃ言わずにみんなまとめてぶっ飛ばえええええっ！」

ルナリアのとどめの一撃が炸裂した。

森ごと吹き飛ばしそうな地上の一切を引き裂く暴風が、何をしに来たのかわからない反乱貴族を天空の彼方へと巻き上げていった。

「……殿下、誰がここまでやれと言いましたか」

「あはは……ちよっとストレスが溜まって……」

「後始末をするストレスもたっぷり味わってくださいね」

「勘弁してくれ」

マリイカとルナリアがそんな他愛のない会話をしていたときである。

運よく軽傷で済んだ貴族の男の一人が、聞き捨てならない愚痴を漏らした。

「せっかく陛下を除いたっていうのに……運が悪かったんだ」

「——今なんと言った？」

ルナリアの声が真剣なものに変わる。

もはや破壊は避けられないことを悟ったのだろう。開き直った男は愉快そうに大笑した。

「今頃はモートレッド殿の手で、クリストフェル陛下はあの世へ旅立っているだろうよ！ もう遅いっ！」

「モートレッドごときに何ができるか」

人に嫉妬することは一人前だが、度胸も力量もない、多少魔導に長けているだけ。

ルナリアにとって、モートレッドとはそういう存在だった。間違っても国王暗殺など企むよいうな大それた男ではない。

「モートレッド殿を馬鹿にするな！ あんな平民あがりの粗野な野獣などを重用する陛下に罰

を与えるのはあのお方しかない！」

「殿下、これはただごとではありません」

さすがは下僕生産機だけあって、マリイカはいち早く、男が何者かに洗脳されていることに気づいた。

裏で糸を引いている者がいるなら、男の言うモートレットドとは、以前のモートレットドでない可能性が高い。

「父上が危ないっ！」

ルナリアは身を翻して馬屋へ向かうと、愛馬を飛ばして一路王都を目指した。

それを見送ったマリイカは、下僕たちに振り返る。

「……厄介なことになったわね。とりあえずこいつらから聞き出せることは、全部聞き出しなさい」

「無礼な！ この平民め、私に触るな！」

「悪いけど、手加減してもらえないなんて考えないことね。どうせすぐに殺して欲しくなるでしょうけど……好きなようにやっちゃいなさい」

「イー——ッ！」



右目に刺さったモートレットドの人差し指は、クリストフェルの脳にまで達していた。

モートレットドの息のかかっていない宮廷魔導士が招集され、クリストフェルの治療に当たったが、脳だけは治癒魔導でも再生できない。

クリストフェルは意識が回復しないまま高熱を発し、危篤状態に陥った。

（あらあら、あんな馬鹿にしてはよくやったじゃないの）

リユーシアが怪しく笑う。

モートレットドのような屑でも、容易に歴史の流れを変えることができる。

それがテロという手段の本質であった。

（あとはルナリア王女のほうに向かった連中だけけれど、うまくやったかしらね？）

国王という意思決定者を失った王宮は、誰もが迷走していた。

強大そうに見える国でも、実はたった一人を消すだけで容易く混乱させられる。

リユーシアはそんな人間の弱さを熟知していた。

これでイェルムガンドはしばらく攻勢に出ることはできない。

現在の国際情勢を考えれば、この事件は途方もない影響を与えることになる。

覇権主義国家のアースガルド帝国がついに敗れた。

クラッツの勝利は周辺諸国にそう受け取られていた。

とりわけイエルムガンド王国の次に狙われそうな大国——大陸西方のパシバル王国などは、イエルムガンド王国の対応次第では参戦する気満々でいたのである。

——ところがそうはならなかった。

もしもクリストフェルが健在であれば、イエルムガンド王国はアースガルド帝国を追撃するか、あるいは自国に優位な講和を結んで幕引きを図ったであろう。

しかし国王が倒れた今、なんら益のない時間だけが過ぎていく。

こうなると周辺諸国もいらぬ火の粉を被る勇氣はなかった。

アースガルド帝国を袋叩きにする機会を、イエルムガンド王国は失ったのである。

それは両国の戦争が泥沼のまま続いていくことを示していた。

まさに両国の天秤を操り、不毛な戦争を継続させるためにこそ、リユーシアはイエルムガンド王国を陥れたのだった。

(これで少しは魔王陛下の溜飲も下がったかしら?)

ここまででは完全にリユーシアの思い通りになっている。あとはもうひとつの目的を果たすだけなのだが……。

(タランティーン公爵から、トリアステラはイエルムガンドにいと聞いたんだけどな……王宮にその気配はないし……どこで何をやってるのよ!)

なかなか連絡を寄こさない部下を問い質すために、タランティーンはリユーシアに搜索を依

頼していたのだ。

様々な思惑が交錯する王宮にクラッツが帰還するまでには、まだしばらくの時間が必要だった。

クラッツは一旦ストラスブル領に戻り、フェルベルの身柄を確認し、旧ストラスブル家の家臣を再編して防備を整えていた。

いかにアースガルドを撃退したとはいえ、アルベルトを失い権力の空白地となったストラスブルを放置しておくわけにはいかなかったからだ。

もちろんこれはクラッツの手に余る実務であり、あくまでも王国から代官か新たな領主が派遣されてくるまでの暫定的な対応だった。

しかしその命令が発せられるよりも早く、クリストフェルは人事不省に陥ってしまった。

そのため国王不弔という情報をクラッツが知ったのは、ルナリアが王都に向かってから数日も後のことであった。

「——スケルデ、お前に軍を預ける。敵が来たなら好きにしろ」

「本当に妾で良いのか?」

「何かあれば責任は俺が取る。行政に関してはブーマー、お前が差配しろ」

「……承りました」